

した。何とお土産は冬虫夏草！無造作にビニール袋に入ったのを手渡されました。チベットは冬虫夏草の有名な産地。これだけの本数だと…、思わず日本価格を想像してしまいました。チベットではこのまま食べることもあるそうですが、先ほどの人参入り焼酎と一緒に入れることにしました。半年後が楽しみです。

保科正之と 危機管理

大友一夫

◆おおとも・かずお、医師、大友内科医院院長、埼玉
県秩父市。

明暦三年（1657年）1月、本郷の本妙寺から火の手が上がった。因縁のある振り袖を供養のため住職が火中に投じたが、これが風に煽られて本堂の屋根に落ちたのだ。その火は一挙に燃え広がり、三日三晩に渡って江戸の町を焼き付くし、江戸城の天守閣まで炎上したほどの未曾有の大火災であった。当時江戸は世界最大の百万都市であったが、死者は十万七千人に及んだと言われている。このときの將軍はわずかに16歳の第4代家綱であった。第3代家光から家綱の後見役を頼まれていた会津藩主・保科正之はここで大英断を下すのである。

火が浅草にあった幕府の米蔵に迫ると、間髪を入れずにこの蔵を解放し、町民に自由に米を持ち出させた。町民が自ずと消火に尽力することを見越しての判断でもあった。さらに大名には粥の炊き出しを命じている。そして家々の再建のために、幕府の金庫から十六万両という破格の大金を支出させた。重臣からは猛反対があったが、「幕府の金はこのような非常時にこそ下々を安心させるために与えるものであり、ただ蓄えておくだけなら、蓄えのないのと同じだ」と突っぱねたのである。

大災害時には国の貯蓄を吐き出す以外にない。しかも即断即決が要求される。年貢米をさらに取り立てるような悪政はこれまでの日本の歴史には減多になかった。

為政が天道に適うときには瑞祥が現れ、適わぬときには災禍に見舞われるという支那で言い伝えられて来た「災異思想」は日本でも認識されていた。したがって大災害が発生したときには、単に天災として片付けるのではなく、政治が間違っていたのだと為政者はまず反省し、民のために免税などの恩典を与えたのである。大津波に襲われた白鳳の大地震（684年）の時にも天武天皇は免税以外にも叙勲、赦免などを行っている。

保科正之は天守閣再建も時期尚早と取りやめた。以後江戸城に天守閣が立つことはなかった。また江戸の人減らしのために参勤中の多くの大名を国に帰らせ、交代でやってくる大名には参勤を延期させている。その結果米の需要は減り、その値段が上がることはなかった。これらも破格の決断である。柔らかな頭と揺るぎない胆（きも）が無ければ果たし得なかった。

正之は会津藩主としても、殉死の禁止や日本初の老齢年金制度（90歳以上の老人に一人一日玄米五合支給）などの善政を行っているが、明暦元年（1655年）には飢饉に備えて社倉制度を設けている。これは朱子の社倉法に倣ったもので、藩で買い上げた米を備蓄米として倉に蓄え、凶作のときには無償で分け与えることもあったという。晩年正之が定めた十五条の「家訓」の中の一つに「社倉は民のためにこれを置き、永く利せんとするものなり。歳饑（う）うれば即ち発出してこれを濟（すく）うべし。これを他用すべからず」とある。そういえば神代の時代にも同じような善政を敷いた人がいた。医薬の神様である出雲の大己貴命（オオナムチノミコト）である。古伝『秀真伝（ほつまつたゑ）』に「飢え足す糧（かて）も 倉に満つ 雨風旱（ひでり） 稔らねど 天糧（あたたら）配り 飢えさせず」とある。病気の予防と治療も危機管理の一つであるが、大己貴命は政（まつりごと）にもその能力を発揮したのである。いわば国手と言ってよい。関東大震災のときに、内務大臣兼帝都復興院総裁として東京を見事によみがえらせた後藤新平も東北出身の医者であった。

ちなみに正之の子で2代藩主正経は、別荘に薬草園を設け、貧しい農民を病気から救いたいと願った。また同じく正之の子で3代藩主正容はそこに朝鮮人参を試植し、これを民間に奨励したことから御薬園と呼ばれるようになった。奇遇と言

うべきか、『秀真伝』に因ると、大己貴命の子、事代主（コトシロヌシ）は近江の万木（よろぎ）の森（高島郡安曇川）に日本で最初の薬草園を作り、病気の治療に当たっている。

今回、テレビで保科正之の番組を見て筆を取る気になったが、そこに桐屋の高遠そばが映し出されていた。桐屋は会津に行くたびに立ち寄る蕎麦屋で、一番粉を使った透き通るような飯豊権現そばと朝鮮人参の天麩羅を必ず賞味している。正之が最初に藩主となったのが高遠であり、そば好きの彼が同じく土地の痩せた会津に齎したのが高遠そばであった。

昨年大震災のため、予定していた晩春の会津旅行を断念したが、この春念願をかなえた。若葉の綾なす里山には桐と山藤の紫が色を添えている。遠方には残雪の飯豊連峰を望む。今回は桐屋の高遠そばを試食し、その土臭い味から正之の昔を偲んだ。また正之を祭った土津（はにつ）神社にも参拝した。そこには正之の履歴を山崎闇齋が碑文した「土津神社靈神之碑」がそびえ立っている。神社の碑石としては日本最大のものである。そして静寂な奥都城（おくつき）には会津五桜のひとつ「大鹿ザクラ」が遅まきの春を演出していた。正之は若いころ禅や儒学を修めたが、晩年は深く神道に傾倒して神道の最高位まで上り詰め、葬儀は破格の神式で執り行われたのである。

今福島は原発事故で苛まれているが、保科正之が培った会津魂で、必ずや復興するものと信じている。

最後に一言。

正之の「家訓」の一つにこうある。「婦人女子の言、一切聞くべからず」と。全員みずがめ座の母、女房、娘、孫娘の言いなりになっている自分にとって、これだけは耳が痛い。